

訳者より

加藤 正

まず何よりも訳了の遅延についてお詫びしなければならぬ。上巻を出しつ放しにしたままで、かくも長い間、本書の最も美味なる部分を、読者の垂涎すいぜんを見ながら延引させて来たことは、何といつても申訳もうしわけがない。こんな結果になったのはひとえに私の病氣と多忙とに由来する。しかも私の分担分の責任をすら果すことができなかつた。種々な人々から援助を仰いだ以外に、本訳書の大きな部分を占めている『電気』の章は吾々の先輩坂田徳男氏を無理に煩わづらわして完成していただいたのである。同氏が多忙を押し吾々を援助された御好意には感謝の言葉がない。同氏の訳出に対しては加古氏がその筆記整理に當つた。

お詫びすべきことはいま一つある。上巻の序言が約せし如ごとくんば、吾々は『下巻において術語および事項についての簡単な訳註を附する予定で』あつた。読者がこの巻でそれを発見し得ないとすれば、それは約束者の無責任か、編輯上の都合しかの然らしめたところと考えていただきたい。前者については約束者の病氣と多忙が、後者については『別の機会』がこれに応えることになつてゐる。しかし上巻の欠点に対する責任は約ごとの如く果すことができた。訂正表は体裁をも顧慮して、それと直ぐ見分けのつく誤植は省略しておいた。

吾々の分担についていえば、第六章から第九章まで、および第十二章、第十六章の六項が加古氏の、その余の諸項（第十、十一、十四、十五章および附録）が私の手に成る。これは共訳者相互に訳稿を交換し、その大部分を満足みぞくのゆくまで推敲すいこうしたので、かく分担を明かにしたりすることは却かえつて滑稽かも知れぬ。先輩坂田氏に依る『電気』

の章へは勿論のことながら編輯技術以上の手を加えなかった。

上巻と同じくこの巻においても吾々はいろいろな人からいろいろの援助を受けている。就中吾々は第七章一〇七——一一一節のギリシア語の引用文について述べておかねばならぬ。ギリシヤ語は吾々にとつて星の謎を読み解く以上に困難であった。同節は実に京大助教授田中周友氏が御深切に吾々に提供して下さった訳出に基いて出来上つたものである。

さて、吾々がいまエンゲルスの遺稿の邦訳を完了し、この国の読者に送るに當つて、私は一つの点に触れておかねばならぬ。即ち上巻の訳者序言において、この邦訳『自然弁証法』が吾が国の現下における一般的理論的意識に対し一つの新たな方向を与えるに役立つであろうと期待した点についてである。かの序言は、吾々の間には未だ眞の唯物論的意識が根を下ろしていないということ、亜流俗悪の謔言哲学が益々広がりつつあるということ、かくては折角の本書も結局は理解され得ず、実を結び得ずして終るであろう、という事柄を顧慮して書かれたのである。案の定、予感は當つた。自然弁証法の問題は一九三〇年の初頭から三一年に亘り、最初は左翼哲学者流の間に、次いである種の物理学者の間に一つの流行論題となつた。種々な人々が様々な色合をもつた虹のような議論を展開した。各々が各々の立場から自己の主観に反映して来た限りでの自然弁証法の影法師について、勝手な意義を附与して見たり、勝手な解釈をこさえたりした。そしてみんなめいめい言いたいだけを書いてしまったあとで、それぞれに満足して自分の席におさまっている。自然そのものの必然的展開、自然の自己運動、を把えること、そして自然弁証法とはこの把握そのものの謂いに外ならぬということから生ずる一切の意義を闡明し、実現すること——そんなことははじめつから捨てて顧られなかつた。彼等の意識の中には論究の不可欠の前提たる唯物論の理論的基礎がなかつたからである。だがこういう人々が何を論じ何処の道を行こうと、それが吾々にとつて何の関係があらう。講壇哲學的『教養』のサロンとは何等の関係なく、ひたすら自然を研究し、自然を把えることを心がける人々の中に

み吾々は期待を持つて吾々の眞の友を求めることができるとだ。胸の悪くなるような信仰告白によってでなく、眞に自然を研究し、自然の連関を明かにすることを知っている人々とのみ吾々の弁証法的自然観は同盟を結び、自己をより高い階段へと登すことができるのだ。既にヘーゲルは指摘した、思惟は現実的にはただ存在の把握としてのみ発展すると、そして訳者序言が明かにしようとした点はまさに次のことであつた、即ち吾々の思惟は自然の必然的連関を把えてゆくに依じて形成せられるのであつて、この連関を把えることを忘れた瞬間から思惟は自己の形成を停止し、既得の形式の中に封じ込まれてしまわねばならないこと。かく形式化され固定化した思惟にはもはや現実的運動の新たな意義をもつた展開は理解され得ないということ、だがそれらの思惟がまさに自然の連関の跡づけを中止して虚空に浮び上つたその地点を想い出し、再びそこからその連関の続きを辿りはじめたら吾々の思惟はどこまでも深く広く展開されてゆくということ。しかし実際に自然を研究することを知らない人間がどうして自己の思惟が対象から離れて虚空に舞い上り、かくてカントの指摘に従つて二律背反的小田原論議に墮つたその地点を想い出すすがを持つて居ようか。更に序言は次の点を明かにしようとしている、即ち思惟が自然を占有し、その必然的な連関を辿るに際してこの両者を媒介するものは人間の実践（実験と産業）であり、この実践は歴史的に発展するのだということ、従つて一定の歴史時代にはこの実践の限界に応じて思惟が自己のために占有し得る自然事実に制限があり、従つて思惟が辿り得た自然の連関にも一定の限界があつたこと——それ故、例えば自然の力学的過程の限界内において自己を形成した思惟は自己を機械論的、あるいは自然と絶縁して先験論的として形式化し、一切をこの思考形式の型に合わせて判断したのである。実践が、実験と産業との発展が、より一層豊富な事実材料を堆積するにつれ、思惟はこの提供に基いて自然の連関をより一層先へ深く辿ることが可能となつた。ヘーゲルが自然の必然的連関を辿つて人間の物質的・精神的発展の頂上にまで到達しつつかくて自己を形成したところの思惟を弁証法として定立したとき、機械論や先験論乃至は形式論理等の過去の思惟形式はすべてこの弁証法的思惟形式の

限られた一側面、自己止揚しやうのための条件を己れのためにとることを知らない自己安住的思惟、であるということがはつきりと分つた。しかもヘーゲル死してまさに百年、自然並びに人間史における幾多の空前の大発見が続々と現われているのに、古ぼけた思惟形式をいつまでも改めようとしたくないのは無智でなければ反動である。マルクス主義はヘーゲルから最高の思惟形式を学んだ。しかしマルクスとエンゲルスはこの形式に自己をとり込めて自分だけの熱を吹いているような人間ではなかった。彼等は時代が彼等にもたらしたあらゆる事物や出来事を研究し、現実世界の連結と史的展開を闡明せんめいすることを忘れはしなかった。マルクス主義はそれに基づいてヘーゲルが辿り得た諸連関の限界を突破し、単に予想されたる連関の枠を出で実証されたる連関を辿ることによって、ヘーゲルから学んだ弁証法的思惟形式により深く広い形成を与え、これを唯物論的弁証法として定立した。

繰り返して言えば、吾が哲学者流の子供らしい鬼ごっこと弁証法に対する無理解は、彼等が存在の把握に、即ち現実世界そのものの連結と展開の研究に少しも真面目な努力を捧げなかったことに由来するのであって、従つて彼等はその故に自己の思惟形式を止揚しやうすべき何等の手段、何等の基礎をも見出し得ないままに、既習の思考方法の中を堂々廻りしている訳である。これこそ現代哲学の阿片的影響を、現代哲学者の研究者的勇氣の欠乏を、示すものではないか。カントが『自ら招致した未成年』として特徴づけたかかる状態は早急に打破られねばならぬ。

本書における諸稿はすべてヘーゲルにおいて最高の形成を体験した思惟を、更に自然の連関に対するより深い洞察に基いて再展開し、より以上の形成を与えんとした努力の結晶である。そこには到るところにおいて、吾々のこれまで習得して来た思考形式がそれに基づいて自己を形成したところのその原の運動形式の止揚しやうさるべき契機が自然の中に闡明せんめいせられているのを見る。この遺稿が完成せられなかったこと、従つて思惟の弁証法的展開もまた統一的に説明されるに到らなかつたことは極めて残念である。しかしながら吾々が更にエンゲルス以後大革命を経験した自然科学の成果に依拠し、自然の全連関を明かにするための努力を怠おこたらなければ、吾々はエンゲルスの企図を一層

大なる規模において実現し得ることは疑うべくもない。恥しいことにも吾々エンゲルスの追従者は革命児ラヂウム以後の自然科学が自然の個々の事物、個々の過程について成果の洪水を氾濫させているのに、自然の全体的な連関とその形態についてエンゲルス以上の洞察を殆んど持っていないのである。

自然弁証法は、全存在の必然的な連関における自然の内的展開の把握そのものの謂いである。それはその故に自然諸科学の成果に基いて自然の全体的連関と展開を明かにするに従つてのみうち樹て得られるものであると同時に、またその故をもって——且つその限りにおいてのみ——それは自然の科学的研究に対する基準たり方法的指示たり得るのである。これ以外の意味から自然弁証法を語り、自然弁証法の意義を喧伝するものにはマルクス主義の哲学は何等の責任も負わない。従つて吾々は例えば自然弁証法、一般に自然認識、における階級性という如き空疎な議論などに関わつてゐることはできぬ。現代の一切の講壇哲学とその左右の亜流は自然および人間歴史の客観的な必然的連関展開の認識に対して無理に目をつむり、何等かの形における主観的倫理に何等かの形の優位を与えている。その左翼ばりの亜流が思い切つてこの倫理に階級実践だとか、無産者的立脚地だとか名前をつけて見たところで、滑稽というより外には挨拶の仕様もない。上巻序言はこれらの亜流を、自然そのものの存在を忘却し、一切の理論的意識の基礎を失つてしまつた経験論の変種だと特徴づけておいた。吾々が自然そのものの必然的連関とその把握とを問題にするなら、吾々は資本主義的実践の範囲内において堆積せられた科学的成果をすらそのために充分利用し得ていないのだ。従来の哲学史上の偉大な哲学者は常に科学の尖端に立つて仕事をして居つた。彼等は自然科学の明かにした最高の成果に基いて、自然の特徴を総合的に考察し、個々の部門に分化して分析を事とせる実証的研究が見得なかつた普遍的な原理を闡明した。彼等がそこで踏み越え得なかつた限界はとりも直さず人間実践の、産業および実験の発展の、歴史的限界であつた。ところが今ではどうだ。ヘーゲル以後世界的な腐敗墮落を遂げた講壇哲学の無気力な亜流は、資本主義社会の範囲内における実践から見ても、その限界の遙か手前に立ち止りなが

ら、階級的制限性を喋々するるのである。自己の実践および認識の限界と歴史の置く制限とは取り違えてはならぬ。だが『現代哲学』の『左翼的亜流』のかかる空語こそ、現代の公認哲学が自然についてすら何等の現実的な理解を展開し得なくなっていることの最も直接的な自己曝露ではないのか。そしてこの事実こそが『彼等の』『階級性』の表明でなければ幸である。健全な自然科学者の間では少くとも自己の研究に関しては、これらの哲学を信用して記の分らぬ議論の中に自己を忘失するような『浪漫主義』はやらないことになっている——お好きな人は流行に感染して満足のゆくまで哲学論をひねくりまわすが宜しい、だがそんなものは科学の役には立たぬ、と。

哲学が自然科学と結びつくためには、それは実際の科学的研究の真中において役に立って見せなければならぬ。それは自然の連関について研究し、個々の分析的探究が明確に見得なかつた諸関係を、それら個々の探究の総合の中から闡明し出すときのみ実際に役立ち得るのである。この問題を取り上げたことは従来の哲学の名誉であつた。現代哲学はこの名誉を自らに担うべくあまりに高慢でありすぎるか——でなかつたらあまりに無気力すぎるのである。

いずれにしても哲学が現在、絶えず新しい事柄を掘り起こして行く自然並びに社会の諸科学に対して、甚しく立後れていることは事実である。しかもこの立後れを克服すべき必要とその方途は未だ決して意識されておはいえない。現代の自然科学者が流行哲学に顔を背けたとしても、それは決して彼等が流行哲学以上の見識を自然法則に対して持っている訳ではない。哲学は自然科学から取り残されている。従つてそれは現代の自然科学と全体的に結びつくことはできないだろうが、それにしても自然研究の個々の分野における個々の部分的特徴と結びつけて余命と自己満足を保つことはできる。たとえ腐れ縁であり、悪因縁であるとはいへ、縁は縁に相違ない。哲学を軽侮することを知つて、それを研究し、それを発展させることを知らない理論的物理学者が、自己のための哲学を必要とするとき、この悪因縁を辿つてヒューム主義やカント主義（いずれも百五十年以上も昔の哲学）に意識的無意識

的にもぐり込むのは当然である。ヒュームが数学的函数關係にのみ學問性を認めたととき、そしてカントが先驗的構成の發見の中に學問の基礎石を見出そうとしたとき、彼等はマツハ者流からプランク者流までの現代的物理哲學の先轍となつたものである。成程理論物理学研究にはいつの時代にもヒュームやマツハの特徴づけを是認するような半面があつた。謂わばヒューム主義やカント主義 *mutatis mutandis* マツハ主義やプランク主義は理論物理学的研究の部分的意識である。そして現代物理學者がプランクの統一的世界像以上のものを定式し得ていないとすれば、彼等は結局自己の哲學を持つた瞬間に自己を部分化し、物理学的研究を片面化しているのだ。ヒュームよりもカントが *mutatis mutandis* マツハよりもプランクが、『より深』かつたとしても、それはすぎ焼鍋の中央が周囲よりも『深い』位の程度である。吾々は鍋の底よりもっと深くならなければならぬ。吾々は理論物理学的研究の、一般に學問研究の全体的意識に到達しなければならぬ。函数的關係や先驗的構成の發見に學問の任務があるのではない。そしてかかる点に関する啓蒙を行つたものは他の如何なるものでもなく哲學である。シエリングとヘーゲル——この二人の哲學的巨人は自然そのもの、必然的な綜合的發展とその認識に人々の目を開いた。これまで哲學者や自然科学者が學問的認識の對象と考へてやつて來たものはいずれも綜合的關係における自然の必然的發展という眞の對象の皮相的部分的理解にしか過ぎないことがわかつた。これは偉大なる啓蒙であつた。しかし、この麗わしい深刻な言葉も淺薄な頭腦によつて誤解されこそすれ、何人もその裏に藏された両哲學者のこの眞意を汲みとることをしなかつた。この眞意はエンゲルスが始めてこれをドイツ觀念論の薄明の中から救つて白日の下に持ち來たし、更にこの意味を新しい條件の下で実行に移した。憾むらくは彼がこれを完結し、綜合的連関において闡明せられた自然の運動法則の性質を体系的に説明する機会に恵まれなかつたことである。吾々は本書に示された自然の綜合的認識の道に従い、その後の科學が個々について分析した莫大な材料を綜合しつつ、自然過程のより深き認識へと進んで行くばかりだ。吾々は空論に組することなく、自然過程の性質に関するより深遠な把握を達成しつつ、自然科学に對

する哲学の甚だしい立後れを克服するばかりだ。

一九三二・一二月

附記

着手以来四年以上もの永い間延引して来た邦訳も一応終ることとなった。この四年の間に吾国における弁証法的唯物論の哲学は流行とともにその凋落を経験した。上巻の発行は喧噪を極めた流行の開始と時を同じうした。そしてこの下巻は——衰微の底にあつて世に出る。而もここには唯物論に基く弁証法的思索が正に五十年前の自然科学の限界の中に埋蔵されたままで投げ出されているのだ。時流的思想家にとっては興味の褪せた玩具であり、好事的哲学者にとっては固すぎる胡桃である。さもあらばあれ、人類の思索は如何なる底をも潜つて、それ自身の必然性をもって、自己意識の花に到達せねばやまない。盲目的な弁証法に支配された哲学は必ずこの弁証法を発見し、これを支配するに至るであろう。

そしてこの花を摘むことに、本書が貢献できるならば、必ずしも愉快とばかりは言えなかつたこの邦訳の努力が十分に酬われたものとして、吾々はこう喚ばずには居られない——唯物論哲学万歳、それは人間の思惟する頭脳とともにどこまでも伸びて行け！

一九三二年五月一日

(エンゲルス著、加藤正・加古祐次郎訳『自然弁証法』下巻)

- 『加藤正著作集』第一巻（「加藤正著作集」刊行委員会、一九八九年一二月）所収。
- PDF化するにあたり、旧漢字は新漢字に、旧仮名遣いは新仮名遣いに改め。
- 読みやすさのために、適宜振り仮名をつけた。
- PDF化には $\LaTeX 2_{\epsilon}$ でタイプセッティングを行い、`dvipdfmx`を使用した。

科学の古典文献の電子図書館「科学図書館」

<http://www.cam.hi-ho.ne.jp/munehiro/sciencelib.html>

「科学図書館」に新しく収録した文献の案内、その他「科学図書館」に関する意見などは、「科学図書館掲示板」

<http://6325.teacup.com/munehiroomeda/bbs>

を御覧いただくか、書き込みください。